

古典の日制定記念

古典の日フォーラム2013

日時：2013年11月1日(金)午後1時30分～4時20分

場所：京都コンサートホール 大ホール(京都市左京区下鴨)

内容：総合司会 中川緑さん(NHK京都放送局アナウンサー)

◆古典の日宣言

浅野温子(女優)

◆あいさつ

古典の日推進よびかけ人 瀬戸内寂聴(作家)

古典の日推進委員会会長 村田純一

◆祝辞 文化庁長官 青柳正規

◆クラシック演奏

「ルクレール:タンバリン 作品9-3-IV」

「バッハ:ヴァイオリンとチェンバロのためのソナタ 第4番ハ短調BWV1017」

京都出身のヴァイオリニスト・玉井菜採さんと、京都在住のチェンバリスト・三橋桜子さんによるクラシック演奏。チェンバロの生演奏は初めてという方も多く、コンサートホールならではの心地よい、柔らかかで自然な響きに酔いしれました。



◆よみ語り「大国主神 義父が与えた最後の試練」

浅野温子

脚本 阿村礼子 音楽 茶喜利(Chakkiri) Yossy



オオナムチ(後の大国主神)は、スサノオが治める地底の国・根の堅州国に向かいました。スサノオの御殿に着いたオオナムチと、彼を出迎えたスサノオの娘・スセリヒメは、一目で互いに恋に落ち、夫婦となる約束をします。

スセリヒメを宝物のように大切に育ててきたスサノオは、オオナムチがスセリヒメの夫としてふさわしいかを試すために多くの試練を与えます。

オオナムチは何度も窮地に立たされながらも数々の試練を乗り越え、とうとうスサノオに結婚の許しを得ます。そして、オオナムチは、スセリヒメとともに助け合い、立派な国を造ることを決意します。

「古事記」をモチーフにしたオリジナル脚本「大国主神 義父が与えた最後の試練」を上演。裸足に白いシャツ、デニム姿でステージ上に現れた浅野さんは、アジアの民族楽器を用いた生演奏に合わせ、台本を片手に縦横無尽にステージを動き回り、一人でさまざまな登場人物を声で演じ分けました。分かりやすい物語と、重厚かつ圧倒的な声量で会場は異空間に包まれ、「古事記」の世界へと誘いました。浅野さんは今後も、「古事記」だけでなく、日本の古典を題材に、このよみ語りをライフワークとして続けていかれるとのこと。

◆講演「私の中の古典文学」 浅田次郎(作家)



浅田さんは、「古典から学ぶべき理由は、時代に淘汰され、何百年と生き残ったものは芸術作品としての値打ちを有するから。問題は、言葉の変化により、特に若い人に専門的知識がないと理解できないと思われること。明治以降、古典教育は文法解析的な学び方に変化し、古典を外国語のように遠ざけてしまった。」そして、自身が幼いころに百人一首をゲーム感覚で親しんだ経験を挙げ、「ただひたすら暗記するというのは、古典を体で覚えているということ。たとえ意味がわからなくても、読んでいて『何かいいなあ』、『うっとりするなあ』、『気持ちいいなあ』と思えるだけでよい。その気持ちは心の底で生き続け、やがて大人になり、折に触れて思い出す。そこでようやく意味を理解すればいい。勉強だとは思わず、娯楽だと思えばよい。最高の娯楽は芸術である」との持論を展開されました。締めくくりに、「歴史に淘汰された古典をしっかりと咀嚼し、次代に日本語として読み継がせ、楽しませていくことを忘れないようにしなければいけない」と呼びかけられ、幕を閉じました。